

⑫ 公開特許公報(A)

昭60-106874

⑬ Int.Cl.<sup>4</sup>

C 09 K 5/00

識別記号

庁内整理番号

6755-4H

⑭ 公開 昭和60年(1985)6月12日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

⑮ 発明の名称 発熱組成物

⑯ 特 願 昭58-214764

⑰ 出 願 昭58(1983)11月15日

⑱ 発 明 者 内 藤 貞 助 東京都港区西新橋1丁目1番3号(東京桜田ビル8階)

⑲ 発 明 者 岡 部 貴 一 日本バイオニクス株式会社内  
平塚市田村5181番地 日本バイオニクス株式会社平塚工場

⑳ 発 明 者 古 賀 雷 二 郎 平塚市田村5181番地 日本バイオニクス株式会社平塚工場  
内

㉑ 出 願 人 日本バイオニクス株式 東京都港区西新橋1丁目1番3号(東京桜田ビル8階)  
会社

㉒ 代 理 人 弁理士 小堀 貞文

明 細 書

1. 発明の名称

発熱組成物  
特許請求の範囲

2. 特許登録請求の範囲

少なくとも鉄、活性炭、酸化促進剤および水を含む発熱組成物において、鉄の一部または全部がスチールウールであることを特徴とする発熱組成物。

3. 発明の詳細な説明

本発明は少なくとも鉄、活性炭、酸化促進剤および水を含む発熱組成物に係る。

鉄の酸化反応による発熱を利用した発熱体は、コスト、安全性、発熱温度などからみて非常に優れており、従来よりこれらの発熱体については、数多くの提案がなされている。その中のいくつかは通気性を有する袋に充填され、いわゆる化学かいろとして既に実用に使われている。

しかしながら、従来より提案されてきた鉄の酸化反応を利用した発熱体に用いられる鉄は粉

末状であり、発熱組成物も粉末状であつた。これらの発熱組成物を実用に供する場合には、発熱組成物は通気性を有する袋などに収納されて発熱体とされるが、袋の容積は発熱組成物の容積に比してかなり大きなものとされている。従つて、袋内の発熱組成物は、袋の変形、移動、反転などに伴つて袋内を自由に移動して偏在することとなり、その結果、発熱体全体の温度分布および厚さも不均一であつた。

一方、関節炎、神経痛およびリュウマチなどは寒冷時には患部に激痛を感じ極めて苦痛であるが、この苦痛を癒すためには患部を加温することが必要である。しかしながら、患部が関節などのように屈伸が激しくまた運動が激しい部位であるかまたは広い面積にわたる場合などには、粉末状の発熱組成物を使用した従来の発熱体では発熱体全体の温度分布および厚さともに不均一であるので、これらの患部に発熱体を密着させて満足のゆく加温を行うことは困難であつた。

本発明者らは、粉末状の発熱組成物を使用した従来の発熱体の欠点を解消し、使用時に於いて発熱体全体にわたって均一な温度分布と厚みが得られ、弾性が大きく、柔軟く、かつ可塑性をもつ発熱体用の発熱組成物を得ることを目的として鋭意研究を重ねた結果、本発明に到達したものである。

すなわち本発明は、少なくとも鉄、活性炭、酸化促進剤および水を含有してなる発熱組成物において、鉄の一部または全部がスチールウールであることを特徴とする発熱組成物である。

本発明で使用されるスチールウールは細長い繊維状の鉄線（以下スチールファイバーと記す）を束ねたもので従来、主として研摩や清掃に用いられるものである。製法としてはたとえば線引き機械によつて鉄線をダイスを通して引き抜き、所要の径に鉄線を延伸して得られるか、または鉄線を切削することによつて得られたスチールファイバーを束ねてスチールウールとする方法などがある。本発明の発熱組成物には、ス

チールファイバーの断面の相当直径が7〜300μのもの好適に用いられる。スチールファイバーの断面は必ずしも円形とは限らず、その断面の大きさは相当直径で表示される。しかし、ここでいうスチールファイバーの断面の相当直径とはスチールファイバーの断面の面積と等しい面積の円の直径として定義される。なお本発明の発熱組成物に用いられるスチールウールは、発熱組成物としての発熱性能を増すためにその表面が脱脂されていることが望ましい。脱脂は、通常、メタノール、トリクレンあるいはアセトンなどで洗浄されることによつて行われる。

スチールウールはスチールファイバーの太さや束ね方などによつて様々なかさ密度を有する。本発明の発熱体用いられるスチールウールのかさ密度は実用上、通常は0.02〜2.5 g/cm<sup>3</sup>、好ましくは0.03〜1.3 g/cm<sup>3</sup>である。

本発明において使用される活性炭、酸化促進

剤および水については、通常の所謂化学かいらに好適に用いられるものであれば特に制限はない。酸化促進剤は通常は水溶性無機塩であつて、溶解度は大きくても小さくてもよい。この無機塩の代表例としてはNaCl、KCl、CaCl<sub>2</sub>、CaSO<sub>4</sub>などが挙げられる。また、本発明の発熱組成物において、所望により、保水材、結合剤、発熱助成剤、水素発生抑制剤などを用いてもよい。

保水材としてたとえば木粉、活性炭、ペーライト、セピオライト、ペーミキュライト、けいそう土、活性白土、シリカゲル、ゼオライト、吸水性樹脂などが挙げられる。

なお、吸水性樹脂は、電離性基をもつた高分子に硬度の架橋結合を導入したもので吸水能が少なくとも25（水g/吸水性樹脂g）のものが好ましい。なお、本発明における吸水能の測定はティーバッグ法（試料となる吸水性樹脂を充填したペーパーバッグを水中に3分間浸漬し試料の吸水性を測定する方法）で行なわれる。吸

水性樹脂の例としてイソブチレンー無水マレイン酸共重合体、ポリビニルアルコールーアクリル酸塩共重合体、でんぷんーアクリル酸塩グラフト重合体、ポリアクリル酸塩架橋物、アクリル酸塩ーアクリル酸エステル共重合体、アクリル酸塩ーアクリルアミド共重合体、ポリアクリルニトリル架橋物の加水分解物などが挙げられる。

保水材は1種でもよく、また2種以上を併用してもよい。

結合剤としてはでんぷん系結合剤—たとえばデキストリン、α化でんぷん、化工用でんぷんなど、多糖類系結合剤—たとえばアルギン酸ナトリウム、カラギーナン、寒天など、セルロース誘導体系結合剤—たとえばカルボキシセルロース、ヒドロキシプロピルセルロースなど、ポリビニルアルコール系、ユリア樹脂系など、水分散エマルジョン系—たとえばポリ酢酸ビニルエマルジョン、ポリブタジエン系エマルジョンなどが挙げられ

る。

結合剤は通常原料混合物100重量部あたり0.5～50重量部、好ましくは2～30重量部である。これらの結合剤は通常ペースト状や液状で用いられ、スチールファイバーの表面への結合剤の塗布もしくは吹付け、または結合剤液中へのスチールウールの浸漬などの手段によつて、スチールウールに予め付着させられていてもよく、スチールウール以外の本発明の発熱組成物の原料を混合する際に添加されてもよい。なお、本発明の発熱体においては鉄の全量がスチールウールであつてもよいが、スチールウールのうち90wt%以下、好ましくは50wt%以下を鉄粉に換えることもできる。

発熱助成剤としてはたとえば金属粉、金属塩、金属酸化物などがあり、これらの代表例としてCu、Sn、Ni、 $\text{CuCl}_2$ 、 $\text{FeCl}_2$ 、 $\text{FeCl}_3$ 、 $\text{CuSO}_4$ 、 $\text{FeSO}_4$ 、 $\text{CuO}$ 、 $\text{MnO}_2$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{CaO}$ など多数のものが挙げられる。

また、水素発生抑制剤としてはアルカリ金属

の弱酸塩や水酸化物あるいはアルカリ土類金属の弱酸塩や水酸化物などがあり、これらの代表例として、 $\text{Na}_2\text{CO}_3$ 、 $\text{NaHCO}_3$ 、 $\text{Na}_5\text{PO}_4$ 、 $\text{NaOH}$ 、 $\text{KOH}$ 、 $\text{Ca}(\text{OH})_2$ 、 $\text{Mg}(\text{OH})_2$ 、 $\text{Ba}(\text{OH})_2$ 、 $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{H}_2\text{PO}_4)_2$ などが挙げられる。

本発明の発熱組成物の各成分量は、通常は鉄100重量部あたり、活性炭2～80重量部、酸化促進剤0.2～30重量部および水2～90重量部であり、好ましくは鉄100重量部あたり活性炭4～40重量部、酸化促進剤0.7～10重量部および水3～60重量部である。なお、こゝで示している水の重量部は、製品発熱体中に含まれる水の量である。

本発明の発熱組成物にさらに保水材を含有させる場合には、通常は鉄100重量部あたり0.2～70重量部、好ましくは鉄0.5～30重量部である。また、結合剤を含有させる場合には、上記の組成物100重量部に対し、0.1～10重量部、好ましくは0.3～8重

量部の割合とされる。

スチールウール以外発熱組成物の各原料はよく混合され、粉末状、スラリー状ないしは液状にされる。こうして得られた混合物はスチールウールのスチールファイバーの表面に適当な手段によつて付着させられる。この場合の付着は混合物自体の有する粘着性によつてもしくは結合剤の助けを借りて混合物がスチールファイバーの表面に固着されてもよく、混合物が複数のスチールファイバーに挟み込まれあるいは取り囲まれその結果混合物がスチールウールの空隙に挟持されてもよく、また、両者の状態が共存してもよい。

混合物が粉末状あるいはスラリー状の場合には、スチールウール表面に混合物を噴置して振動を与えるあるいは混合物をスチールウールになすりつけるなどによつて付着させる。また混合物が液状の場合にはスチールウールを混合液中へ浸漬し引き上げる、ないしはスチールウールを液状の混合物に浸漬し引き上げたのち、乾

燥状態のその他の混合物をスチールウールにまぶすなどの多数の手段によつて付着させることができる。このようにして得られた発熱組成物は必要に応じて乾燥され過剰の水分が除去される。

本発明の発熱組成物は通常の化学かいろに用いられていると同様な通気性を有する袋に充填され、発熱体として実用に供せられる。通気性を有する袋の形状としてはたとえば、長方形、正方形、多角形、円形、半円形、楕円形などが挙げられる。発熱組成物の充填量には特に制限はないが、通気性の袋の容積に対し、充填前の発熱組成物の見かけの容積の0.5～2.0倍であることが好ましい。この通気性を有する袋に本発明の発熱組成物が充填された発熱体は使用時までの間は非通気性の袋などに収納して、発熱体と空気との接触を絶つて保存される。

本発明の発熱組成物を用いた発熱体は大きな弾性、柔軟さおよび可撓性を有するとともに発熱体全体にわたつて均一な温度分布と厚さを有

し、屈伸部位用、広面積用採暖具などに好適に使用できる。

次に本発明を実施例によつてさらに具体的に説明する。

#### 実施例

ボンスター（商品名；日本スチールウール社製）（スチールファイバーの相当直径が約40μで、100mm×100mm×10mmのスチールウール）を3枚重ね合わせた。3枚のスチールウールの重量の合計は18.8gであつた。粒径がそれぞれ10～100μの範囲内である木粉 6g、活性炭 4gおよび15%食塩水 12mlとの混合物を前記のスチールウール上に均一に広げ、振動を与え、スチールウールの空隙に前記の混合物を、ほぼ均一に充填させることにより、発熱組成物を得た。このようにして得られた発熱組成物をナイロン不織布の内面に厚さ50μのポリエチレンフィルムをラミネートしたシートを片面とし、微多孔膜であるタイ

ベック1073B（商品名；デュボン社製）を他面とする大きさ 120mm×120mmの袋内に収納し、袋の開口部をシールすることにより、第1図に示したような発熱体を得た。第1図はスチールファイバー1の表面に木粉、活性炭および食塩水を混合した前記の混合物2を付着させた発熱組成物を通気性を有する袋3で包んだ発熱体を示す。500mm×500mm×50mmの発泡スチロールの上面中央部に前記の発熱体をタイプツタ側を上側にして載置し、その上に600mm×600mmの木綿100第100番双糸のネル2枚を、発泡スチロール板全体を覆うようにかぶせた。以上の試験条件のもとで発熱体の上面の中心部および2本の対角線上でかつ中心部からそれぞれ60mm離れた4個所の計5個所で発熱体としての発熱特性（発熱到達温度・発熱時間）を測定した。発熱到達温度の測定は銅-コンスタンタン熱電対を用い、室温20℃、湿度65%の恒温恒湿室で行つた。上面の中心部における測定結果を第2図に示す。

この発熱体は上面の中心部の測定点において40℃以上の温度を約8時間にわたつて持続し、最高温度は49℃に達した。また、中心部の測定点の温度と中心部以外の4個所の測定点の温度との差はいずれも2℃以内であつた。

#### 使用例

実施例で示したと同様な発熱体を膝の関節部に装着したところ、発熱体全体にわたつて約9時間おだやかに発熱し、弾性が大きく、かつソフトな装着感が得られた。

#### 4. 図面の簡単な説明

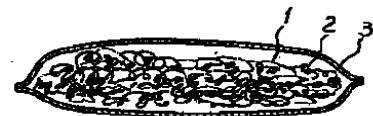
第1図は本発明の発熱組成物を用いた発熱体の断面図である。

第2図は実施例における発熱体の発熱特性を示す図面である。

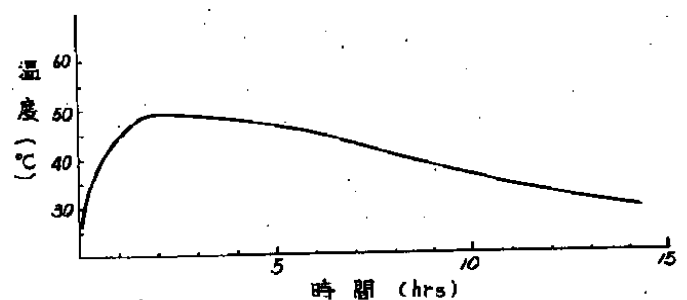
図面において

1…スチールファイバー 2…木粉、活性炭および食塩水の混合物 および 3…通気性を有する袋

第1図



第2図



**PAT-NO:** JP360106874A  
**DOCUMENT-IDENTIFIER:** JP 60106874 A  
**TITLE:** HEAT GENERATING COMPOSITION  
**PUBN-DATE:** June 12, 1985

**INVENTOR-INFORMATION:**

NAME	COUNTRY
NAITO, SADASUKE	
OKABE, KIICHI	
KOGA, RAIJIROU	

**ASSIGNEE-INFORMATION:**

NAME	COUNTRY
NIPPON PAIONIKUSU KK	N/A

**APPL-NO:** JP58214764  
**APPL-DATE:** November 15, 1983

**INT-CL (IPC):** C09K005/00

**US-CL-CURRENT:** 126/263.01 , 126/263.05 , 252/69

**ABSTRACT:**

**PURPOSE:** To provide a heat generating compsn. which has uniform temperature distribution and thickness all over the whole body and high elasticity and is excellent in flexibility, consisting of steel wool, activated carbon, an oxidation accelerator and water.

**CONSTITUTION:** A raw material mixture consisting of 2~80pts.wt. activated carbon, 0.2~30pts.wt. oxidation accelerator such as NaCl, 2~90pts.wt. water and optionally a water-retaining agent such as woodmeal and a binder such as dextrin is deposited on 100pts.wt. steel wool having a diameter of 7~30  $\mu$  and a bulk density of 0.02~2.5w/cm<sup>3</sup> to obtain a heat generating compsn., which is then charged in an air-permeable bag.

COPYRIGHT: (C)1985,JPO&Japio